

イエスの時代のガリラヤ

相 沢 文 蔵

まえがき

- 一 ガリラヤの歴史的背景
- 二 ガリラヤの精神的環境
- 三 ガリラヤ人と熱心党

まえがき

1

A.D. 一世紀の前後には、ユダヤ民族の歴史的運命を決するような重要事件が続発したが、それらはいずれも、ガリラヤ地方を震源地とするものが多かった。まず B.C. 4 年、ヘロデ王の死を機会に、それまで永くおさえられてきた反ヘロデ的、従ってまた反ローマ的抵抗運動が一時に爆発を見、その後の約一〇年間アナキイの状態が連続した。そのあげく、ローマはヘロデ王の故領のうち、ユダヤ本土を属州になおしてこの御し難いユダヤ人の統治に本腰をいれることになった。この統治にあたって戸籍登録^{センサス}が行われたが、これを機にガリラヤ人ユダの反乱があり、そのさい、反ローマ抵抗精神にもえる熱心党^{ゼイロタイ}という狂信的な愛国者団体が創設されたとされる。

この伝統は、ローマの強圧的な統治と干渉の間隙をぬって、その後も絶えることなく、しばしば騒擾や反乱をくりかえした。その最後の爆発は、A.D. 66—70年のユダヤ戦争にほかならなかった。この対ローマ抗戦は多数のユダヤ人の奴隸化とイエルサレム神殿の炎上をもって終ったが、これによってユダヤ民族共同体の解体が著しく促進されることになった。

これらの反ローマ的抵抗精神はガリラヤ地方に起源するものが多く、この地方には異邦人勢力に対する抵抗精神は人心深く滲透していた。これらの事件が相ついでおこった同時代にイエス教団の宣教活動が行われたのであり、イエス自身と彼に従った使徒達（裏切りのイスカリオテのユダをのぞく）はすべてガリラヤ住民の出であった。原始クリスト教を生成したイエス教団の動きの背景には、この地方独特の精神的雰囲気（^{モスト}モスト）が息づいていた。そこに見られた特殊なエートスはどのような事情によって形成されたかを考察するのは決して意味ない事ではない。そしてこれは、そこに特有な歴史的・社会的背景において形成されたものと見なければならぬ。

イエスの時代を綜観的に把握する試みの一端として、この小稿においては、最初にガリラヤの歴史的背景を概観し、ついでそれに発しているガリラヤ地方に特殊な精神的状況をさぐり、次にそこに起源した熱心党（^{イロダイ}イロダイ）とガリラヤ人の関連について吟味を加えたい。このさい、関係文献によって教えられるところよりも、原史料であるヨセフオスの著作内容に批判を加えつつ、これを使用して問題に接近したいと考える。

一 ガリラヤの歴史的背景

ガリラヤ地方におけるイスラエルの民の歴史は、その当初から異邦人との交渉関係をもって始まる。イスラエルの民が沙漠地方からカナンの沃地に侵入したのは、B.C. 二千年紀の終り頃とされるが、すでにその頃、このガリラヤ地方

には先住のカナン人が相当に高度な都市国家を形成し、バアル礼拝に結びついた農耕文化を誇っていた。この地方に侵入したイスラエルの諸部族は、これに対して永い征服事業を進めたが、ついにこの先住者を完全に駆逐するに至らず、それとの混淆又は共存の關係が永く続くことになった。ことに、この地方は内陸部から地中海又はエジプト方面に通ずるルートにあたっていたので、周囲の異民族群との交渉も密接であった。

人種の混淆や文化の交流において見られたこのような開放性は、南方ユダヤ本土のもつ地理的・歴史的な封鎖性に対して極めて著しい対照をなすもので、ことに、世界的傾向が強かったヘレニズム時代に入ってはいよいよ著しく、外来文化は何等阻止されることなくこの地方に入ってきた。この地方の名称ガリラヤ (Galil-Hb. Galilaea-Gr.) は Kreis od. Bezirk の意味とやれ、^①異邦人と接触する辺境の地という内容を持ち、早くから、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれていた。イスラエルの正統をもって任じた南方ユダヤ本土の住民からは、その異邦人との共存や接触の度合の強さの故に、蔑視の意味をふくめてこのように見られていたのであり、この表現は、イエスの時代にも普通に用いられていた。^③

イスラエルの純粋性をもたず、従って重視されなかったことは、ソロモン王がこの地方の二〇の都市をフェニキヤの国王から提供された物資の代償として取引に用いた例^④からもうかがわれる。ソロモンの死後、この地方は北朝の「イスラエル王国」の領土とされたが、この王国がアッシリアによって滅ぼされた (B.C. 721 年) ^⑤ さい、住民の上層者は捕囚として連行された。そのあとには周辺の各種の異邦人が、なだれこんで、そこ住民の主流をしめるに至り、イスラエル系の住民は少数者として居住するに過ぎないものとなった。その後、永い間彼等の民族的歴史はつねに南方のユダヤ本土を中心として展開されてきたのであり、この地方はユダヤ教の本流からはなれ、預言者的伝統もうす化外の地となった。

この地方が再びイスラエルの民にとりもどされたのは、はるか後のB.C. 100年前後のことであった。イスラエルの民の栄光ある民族王朝の建設に成功したハスモン（マカベア）家は、その草創期をへたのちは、しきりに対外発展をなし得るに至った。ヨハネスIIヒュルカノス（135—105年）の頃には、南のイドウメア地方に進出して、これをユダヤ化したのが、ついで、アリストビュロス（105—104年）とアレクサンドロスIIヤンナイオス（104—78年）の頃には、北上してこのガリラヤ地方やこれにつづく奥地までその勢力範囲におさめ、そこに居住する異邦人に対して武力をもちいてユダヤ教とその慣習を強制した。このように、イスラエルの民の勢力圏が南北にのび、これをユダヤ化したことは、「世界史のすすむ方向を決定した」という見方さえある程に重要な意味をもつ事件であった。

ガリラヤ地方には、それまでは、ユダヤ教と無縁なイトリア人・アラブ人・フェニキヤ人・シリア人のほかギリシヤ人まで居住し、その間に少数派をなすユダヤ人がみられるのみであった。ハスモン家は、このユダヤ人居住者に保護を加えると共に、これら異邦人にヤハヴェ礼拝を強制してユダヤ化をすすめた。この王家による領土的拡大は、アレクサンドロスIIヤンナイオスの治世においてその絶頂に達したが、それ自身次第にヘレニズム化し、世俗化の傾向を明かにしていたこの王家によるユダヤ化も、当然のことながら限度があり、どのような形式と内容をもって行われたものか明かではない。しかし、この武力征服によって新付の地となったこのガリラヤに向って、ユダヤ本土から継続的に大量の移住者のエクソダスを見ることになり、実質的にはこれによってこの地方のユダヤ化が進められたとすべきであろう。

この本来ヘブライズムの担い手として登場したハスモン家は、次第にヘレニズム化していったが、表面のはなやかな発展のうらには、内部的には惨たんたる分裂と内乱が相ついだ。この王家をとりまいた上層者達は、この王家とそ

のヘレニズム化を支持したが、その下にはこれに反撥して今やこれを見放し、その打倒さえものぞむに至ったパリサ

イ的中層者があり、さらにその指導下にあった民衆があった。外にはエジプトやシリアの強大なヘレニズム王国は、たえず干渉の機をうかがっており、これらの外部勢力と結びつかんとするもの、この外部勢力をあくまで排除せんとするものなどの対立もあり、内部的紛争は相ついだ。ハスモン家は、これら対立した諸勢力のバランスの上にたち、傭兵隊を活用することでその地位を維持し得たうえ、対外発展さえもなし得ることが出来た。

すでにヒュルカノスの頃から内部的対立が尖鋭化して居たが、その頃からユダヤ本土やエルサレムをすててエクソダスを行う者が相ついだ。パリサイ派とその指導下にあった人民側からの抵抗は次第にたかまり、反乱はくりかえしおこった。とくに、アレクサンドロスⅡヤンナイオスは強い弾圧をもつてのぞみ、それに対して88年頃、大きな抵抗があったさい、ヨセフォスによれば、この王の残虐な弾圧⑥におののいた人民は一夜にして八、〇〇〇名も逃散した。このエクソダスの一部はアレクサンドリアに向ったとされるが、ユダヤの手近かにあり、しかも政治的追及の手の及ぶことの少いこの新付の地ガリラヤに向った者もあったことは充分考えられる。アレクサンドリアさしておちていったのは疑もなく、その都市生活を期待した者達であったのに対して、ガリラヤに向った者達は、その農業その他の業種に新しい生面を開く期待にもえた者達であつたろう。

これから相当長い期間にわたって続いたユダヤ本土からのエクソダスに関連して、いくつかの重要な問題が派生してくる。すでにヒュルカノスの頃、その統治を喜ばず、またサドカイ的勢力の一端をになう祭司貴族の支配するエルサレム宗団にあきたらず、これをはなれて分派活動を行うものがあらわれた。これはエッセネ派⑧の分派活動にほかならないが、やがて彼等のなかには死海湖畔の荒野にのがれて、そこに新しい宗団を設立したものがあつた。いわゆるクムラン宗団⑨がそれである。やがて、「死海写本」はそこにおいて製作されることになる。

エクソダスの末、ガリラヤ地方に定着した者達は農業その他の生業に期待した中層又はそれ以下のもので、イエス

一家が属したような階層がそれであったと考えられる。彼等がよりどころとした宗教的意識は後述するようにパリサイ派の強い影響下にあった。イエス一家の先祖がこの頃ユダヤ本土からガリラヤにむかったエクソダスの波のなかに見られたとするのは根拠のない事ではない。

アレクサンドロスIIヤンナイオスの後のハスモン家は、その内訌に禍され、もはやかつての栄光は消えさり、衰運に向うのみであった。これはローマ勢力に干渉の機会を供することになる。また、これを機に、この王家につかえていたイドウメア出身のヘロデ家は、たくみにローマ権力者にとりいり、ヘロデの父、アンティパテルは主家にかわって支配の座につくことになった。東方発展の途をすすむローマと、西進するパルティアとの対立関係は、この頃の歴史の主流をなすものであるが、ガリラヤ地方は、この対立関係のなかで変転をかさねた。

アンティパテルはガリラヤの統治のため、子ヘロデをその軍司令官に任じて軍・政二面を担当させた（B.C.47年）。その住民のなかにはこの新興のヘロデ家を支持するもの、これに對して、ハスモン家への支持をかえず、そのためには、パルティア勢力と結びつかんとするものと対立関係が見られた。パルティアの西進の勢は、一時にせよパレスティナ一帯をその支配におさめ、これと結んだハスモン家の中興もなるかにみえ、ヘロデはローマ権力者の許に亡命するのやむなきに至った。しかし、この一帯の地が、パルティアの支配に帰することは、ローマの東方発展の上に致命的な打撃を意味するものであった。ローマはこれに對抗して、ヘロデを「ユダヤ国王」に任じ、強力な支持を与えてパルティア勢力の駆逐を行わしめた。ここにハスモン家にかわる新しい支配者としてヘロデ家が登場することになった（B.C.37年）。このように発足したヘロデ王の権力取得の過程やその権力の本質については以前に考察したことがある。彼は、かくてローマの「盟邦国王」として、ローマの東方における「見えざる国境線」の防衛に任ずる責任を負わされた。彼の永い治世（37—4年）において、微少な存在ながらもヘレニズム国王として専制をふるい、人民側

からのいかなる抵抗をも許さなかった。そして領内のヘレニズム化はいよいよ進められた。ガリラヤ地方はパルティアに対する防衛の前線基地をなしていたので、その首都セフォリスには兵器廠を設けたり、この地方につづく辺境に軍事植民地をおく等、ローマ権力者のよせる期待にそうよう懸命の努力をかさねた^⑩。

ヘロデ王の死後は、パレスティナ一帯の政治的動向は、いよいよローマ権力者の意向一つにかかることになった。

ヘロデの故領は彼の男子達の間に三分され、ユダヤ本土とサマリアはアルケラウスに、ガリラヤにつづく東北辺境地方はフィリポスにそれぞれ統治が認可された。一方、ヘロデの死の直後から始まった反ヘロデ的反乱は、ガリラヤを基地としたものが多かったが、アルケラウスは、人民側の抵抗をおさえきれず、領内統治に失敗してローマ権力者の期待を裏ぎり、ついにA.D. 6年ユダヤ本土はローマの直轄する属州とされた。ヘロデリアンティパスは統御しがたいガリラヤ住民をよくおさえB.C. 4—A.D. 37年にわたる期間その統治を続けた。イエスの宣教活動は、時期的にも、場所的にも、彼の支配下においてなされたのであった。

ガリラヤの中心は、はじめ行政的にも、軍事的にもセフォリスで、イエスの故郷ナザレの村はこの首都の周辺にある従属的村落の一つであった。ヘロデ王の死を機会に反乱を企てたユダ(エゼキアスの子)はこの都市を拠点とし、ここにあったヘロデの兵器廠をおそって武器をうばい、部下を武装させた。これはつづく一連の反乱を誘発することになり、この後一〇年間のアナキの端緒をなすものとなった。^⑪ローマはシリアから軍隊を急派してこの反乱の鎮圧にあたらなければならなかった。セフォリスはこのユダの反乱に加担したかどで、ローマ軍に焼き払われ、その住民は奴隷とされた。この都市をヘレニズム風に再建する事業はやがてヘロデリアンティパスの手によって進められることになる。イエスの宣教活動開始前の知られざる生涯をこのヘレニズム風の都市セフォリスを通してかいまみる試みは、理由がないわけではない。

ともあれ、このガリラヤ地方がハスモン家によって新付の地とされ、云わば植民地の性格をもたされて以来、ユダヤ本土から住民のエクソダスが数十年にわたってつづいて見られたのであり、ガリラヤにおける住民関係は、かつての少数派であった地位が逆転し、イエスの時代にはユダヤ人が主流を占めるまでになっていたことは明かに云い得るところである。

【注】

① Strack-Billebeck, Kommentar Bd. I S. 153

② イザヤ、九一

③ ヨハネ、一四六 七五二

④ 列王上、九一〇

⑤ A. Toynbee, Hellenism 1959 P. 177

秀村欣二・清永昭二訳「ヘレニズム」一九七頁「イドウメアとガリラヤがハスモン家の手に属さなかったならば、世界史は異なる過程をとったかもしれない。なぜならばその場合には、ヘロデ大王もナザレのイエスもユダヤ人として生まれることはなかっただろうからである。」

⑥ Ant. XIII 380

⑦ ibid. 383

二 ガリラヤの精神的環境

ガリラヤはユダヤ人の勢力の範囲に入ってから歴史はあさく、そこには南のユダヤ本土とは異った特殊な歴史的

⑧ エッセネ派については杉田六一著「ユダヤ革命」(昭和三三年)中にエッセネ概説という該博な記述があり、クムラン宗団との関係までふれており、教えられるところ多い。

⑨ クムラン宗団の成立時期については、いまだ定説と称すべきものはないが、ある時点に一挙に成立したと見る必要はあるまい。ここではヒュルカノスの頃にその起源をもつという説に従いたい。J. A. Allegro, The Dead Sea Scrolls 1956 P. 85

⑩ 拙稿「ヘロデ王に関する一考察」(人文社会9号)38頁～

⑪ 拙稿「ヘロデ王の統治政策」(人文社会15号)17頁～

⑫ 拙稿「熱心党をめぐる二三の問題」(人文社会2号)47頁～

⑬ S. J. Case, Jesus 1929 P. 202～

⑭ E. Schürer, Gesch. des jüdisch. volkes II, S. 29

背景と政治・社会的状況があった。そこにはユダヤ本土には見られない多彩な人間像が数多く現れるような地盤があったとしなければならぬ。

はじめ、イスラエルの諸部族がガリラヤ地方に侵入し、先住のカナン人を圧迫してここに定着して征服事業をすすめたところ、ゼブルン、ナフタリの諸部族は、「命をすてて、死を恐れぬ民」^①とされた。このような激情的な気象のはげしさと戦闘的な生活意識は、この地方に定着したイスラエルの民の最初から身についていたものであったといであらう。このような激情は本来沙漠の民のものであったにせよ、彼等が農耕生活に入ったのちも消えさるものではなく、いよいよそれが昂揚してゆくような条件がそこにあった。

そこにあつては、彼等は異邦人達を完全に征服するに至らず、それとの共存や混淆もやむを得ない状況におかれていた。ガリラヤのもつ開放的な特殊条件のもとにあつては、異邦の宗教と文化の強い影響の下で彼等自身の神礼拝を固守するためには、たえずそれらと対決して自らを防衛する身構えにたたなければならなかった。そこにはたえず切迫した緊張関係が見られた。彼等の激情的で戦闘的な気象のはげしさはこのような条件のなかでそだった。そしてこの激情にささえられることによって彼等の神信仰をまもりつづけることが出来た。ガリラヤ地方には、早くからこのような精神的伝統が形成されていたとすることができる。

しかるに、この地方は、北王国の滅亡後は全く異邦人の占拠するところとなった。しかし、ハスモン家によって、再びこの地方のユダヤ化が進められるに至って、ユダヤ本土のいわば植民地の性格をもつことになり、ついでの時代の政治・社会情勢に応じて時には継続的に、時には散発的にユダヤ本土からこの地方に向ってエクソダスが行われていった。これらの南方からの移住者が定着したガリラヤの文化的・精神的環境はヘレニズム世界の共通的性格の例外をなすものではなかった。そこには異邦人とその文化との密接な交渉関係があり、異邦の神々ががりひしめき

あう世界であり、異邦的礼拝や習俗はごく手近かなところにあった。そこには、かつてイスラエルの諸部族が異邦人の礼拝や文化と対決した伝統が再びよみがえるような条件があった。そのような状況にあつては、異教的なものからの感化や影響を無意識のうちになにがしかは受けざるを得なかったが、それだけに、そのもつ影響力の強さを意識した時には、いよいよそれとの対決を迫られた。とくに、ハスモン王家やヘロデ王家の治下において、本土をすて、この地方に定着した者達のエクソダスは反ヘレニズム的な信仰上の動機に発してただけに、そのような異教的環境においては、ことに抵抗の激情にかりたてられた。

のちのユダヤ戦争のさい、ガリラヤ地方の防衛軍司令官としてローマ軍に抗戦した経歴をもつヨセフオスは、ガリラヤの住民のもつ歴史的に根深い激情的な性格について次の如く伝える。

「ガリラヤの住民は強力な異民族にかこまれ、常に敵襲にそなえてきたので彼等は幼にして戦になれている……：その人口は常に多く、そこには勇氣に欠けた者はみられない」^③。ガリラヤ住民のこのような激情的な気象は、彼等の信仰によって支えられているだけに、事にのぞんで生命をかけた頑強さがあつた。このような例は数多く見られたが、イエスの時代に近い頃の一・二の例をあげる。ヘロデ王がユダヤ国王の任命をうけて帰国して国内の制圧を始めた時、まずガリラヤにおける抵抗を排除しなければならなかった。ローマ軍の支援をたのむヘロデの権勢の前に屈服する者も多かったが、山岳地帯のとりでによって最後まで抵抗を続け、降服をすすめられても応ぜず、ヘロデ軍の目の前において、「奴隷として屈従するよりは死をえらぶ」^④として自決するような指導者もいた。このような気風はガリラヤ住民の典型的なものを示している。イエスに従った弟子達さえも、日頃ガリラヤ人と信仰や習俗において対立していたサマリア住民の不親切を怒り、「天から火を呼び下してあの奴らを焼き殺そう」^⑤というような激情をひそめていた。

ヨセフオスは、ガリラヤの農民意識について興味ある史料を伝えている。

A.D. 41年ローマのカリグラ帝が自らの像

をエルサレム神殿の聖所におかせようとした。その意をうけたシリア総督ペトロニウスは手勢をひきいてのりこみ、途中ガリラヤ地方を通過した。彼の意図を察したガリラヤ住民は早速その阻止運動にかかり、得意のすわり込み戦術に出た。ペトロニウスはガリラヤの上層の者をまず説得せんとして彼等をティベリアスに会同させた。そして「ローマに服属する民は彼等自身の神々の像とならんでローマ皇帝像をたてている。ユダヤ人のみこの慣習に反するとせば反乱にひとしい仕業だ^⑥」としておどした。これに対して彼等は、「あえて皇帝像を建てるのを強行するならば、その先に全ユダヤ人を殺せ」と叫んでつめよった。この勢にペトロニウスは尻込みをし、皇帝像をエルサレム神殿内にたてる件は一応とりやめとなったが、彼はこのために皇帝から死罪の宣言を受けるのを覚悟しなければならなかった。

この挙の阻止運動のさい、多数のガリラヤ農民は四・五〇日のすわり込みを行い、そのために播種期を逸するの^⑦も意^⑦としないという感慨を示した。この事件は、当時の祭司的・戒律的なユダヤ教の本流に対して充分に批判的であった筈のガリラヤ農民もなお神殿中心の意識にもえていた事を示すとともに、彼等のローマ権力に対する抵抗意識の強さをも示している。このようなガリラヤの精神的環境は後述の熱心党的な動きをうみ、かつそれを成長せしめる温床となるべきものであった。このような素朴単純な彼等の心情はタルムードにおいて、「ガリラヤの民は金よりも名誉を重んじ、ユダヤの民はその反対である^⑧」としてこれら両者の精神的環境に発する違いを表現している。

ガリラヤ住民のこのような特殊な心情のよってきたところを、S・A・スミス^⑨は、ガリラヤのもつ自然的条件に求める。即ち、この地方には、火山脈が南北に走り、諸所に温泉の湧出もあり、熔岩がガリラヤ湖畔まで迫っているような火山の自然条件がある。これが彼等の volcanic な激しい心情と関係ありと解釈する。この地方の一角を火山脈が貫いているのは事実であるにしても、そのかなりの部分は農業の盛んな沃地であり、丘陵性の高地には農牧も

行われ、全体を volcanic と規定するのは無理である。まして、人間的氣質の如きエートスの形成を自然条件からのみ解釈するのは一面的に過ぎる。これは彼等が負っていた前述のような歴史的、従ってまた社会的背景にてらしてその形成の過程が理解されるべきものであらう。

ガリラヤの住民にあつては、ユダヤ本土と異つた、そこに特有の歴史的背景においてその激情が形成されていったが、それは本来、異教的なものに対決する激しさであり、その激情は、異邦人の神礼拝やその文化に対して機に応じて触発されていった。ローマという抗しがたい現実的な政治権力が彼等の前にたちふさがった時、彼等はそれに対して、反乱という形式の政治的表現をもつてたちむかうことになる。そして、それはローマの身代り権力をその本質としたヘロデ家に対してまずむけられたのも当然のことであつた。彼等を「反乱ずき」と規定するのは、ローマ権力者はもとより、ローマ的立場にたつヨセフオスやローマの歴史家においても一致した見方であつた。事実、彼等は度重なる反乱の挫折にも拘らず執拗にそれを繰り返しかえし、ついにはユダヤ戦争の破局にまで立ち到つたのであつた。

ガリラヤの住民は、前述のように B.C. の末期の数十年間に、ユダヤ本土からのエクソダスの民がその主流をしめるに至つた。その住民の人口について伝えるヨセフオス史料は誇大に過ぎることは、これを利用するものがひとしく指摘するところである。福音書においても、おびただしい群集にかこまれたイエスの姿についての描写が数多く見られる。ヨセフオスはガリラヤに関する一般的記述のなかでこの地方の豊沃な事、いたる所耕されて農業は頗る盛んな事をのべ、つづいて、「都市は人口密であり、村落さえも土地がよく肥えているので人口は多い。それらの最小なものも人口一万五千をこえる」とし、さらに都市と村落あわせてその数二〇四にのぼるとする。これによって計算するとガリラヤの人口は三〇〇万をこえることになる。ガリラヤ地方の面積は時代によって多少の出入りがあるが問題のこの時期には二、〇〇〇平方哩程度とされる。この人口はその面積の微少さに比してあまりにも過大である。

また都市と村落（都市と村落の違いはそれをかこむ城壁の有無による^⑮）の数あわせて二〇四とするのも多数に過ぎる。ヨセフオスの著作中にあらわれるガリラヤ地方の、その名前の知られる都市と村落の数は、あわせて五〇程度に過ぎない。恐らくこの数にあまり遠くないものがその実数であろう。ヨセフオスのあげるガリラヤ住民の人口と都市と村落の数は、古代の文人、とくにヨセフオスの場合しばしば見られる数的誇張の一例であろう。ガリラヤ地方の人口については、古代人口の權威J・ペロツホはユダヤ戦争直前頃のものとして四〇万程度とみている^⑯。この見解は参考とするにたるものであり、イエス時代のそれは、これから多少下廻るものとしてよいであろう。

ガリラヤの住民の社会的階級構成については、何等まとまった史料はなく、すべて零細なものを積みあげて推測にまたねばならぬ。この地方がハスモン家の武力による発展によってユダヤ化された時、そこに居住した異邦人からの土地収奪は当然行われたと考えられる。そしてこの地方の新しい支配と経営のため権力を賦与された者達ものりこんで、この王家の傭兵あがりの者達にも土地の配分がなされ、新しい都市建設も行われたことも考え得る。ハスモン家の末期にローマの干渉の手が加えられた頃、B.C. 57年、全パレスティナは五つの行政区に分割されたが、ガリラヤもその一区とされた^⑰。そのさい、地方有力者達はその区内の行政と徴税の任をおった地方会議^{シユヤトリオン}の組織を命ぜられ、それはガリラヤのほぼ中央部をしめるセフホリスにおかれた。その時以来、この都市はガリラヤのメトロポリスとなった。

ハスモン家とそれにつづくヘロデ家の治下において、引きつづいて行われたヘレニズム政策にあきたらず、時にはこれに抵抗を試みることや弾圧をうけるなど、少くとも現状に不満な分子があり、彼等は何等かの動機をもって、ユダヤ本土から相ついでエクソダスを行った。彼等の多くが定着したと考えられるガリラヤ地方は、ヘレニズム風に開化していたことは、ユダヤ本国以上であったが、何よりもそこは、政治的権力による拘束はユダヤに比してはるかに

弱く、宗教的には、当時の主流的ユダヤ教のもった祭司的・戒律的要素は南に比して強からず、より自由な天地がそこにあった。このガリラヤ地方にエクソダスを行って定着した者達は、階層的には、中層又はそれ以下の身軽な云わば *détachés* であり、その意識においては、パリサイ、とくに戒律的・祭司的なそれではなく、黙示文学的パリサイ主義において代弁されるものであったことも明かであろう。イエスの一族がこのようなものとして、前述のいずれかの時期にユダヤ本土からのエクソダスの波にのった者に属していたと見るべきであろう。この一族は本籍をユダヤにもち、そこに親類・知人もあったと考えられてよい。

ガリラヤ地方は古来、幾多の天然資源に恵まれ、とくに南部一帯は土地豊沃で農業がよく行われたことは、ヨセフ・オスのほか旧新約聖書を通じてうかがうことが出来る。これに関してヨセフ・オスは次の如くいう。

「ガリラヤはいたる所土地肥え、森林も豊富で各種の樹木が生育する。その豊沃なることは、最も怠慢な者をも耕作に心をむけさせる程である。従っていたる所耕され、一かけらの荒地もない」。¹⁹「そのこえた土地からあらゆる種類の穀物の収穫があり、また各種の樹木とくにオリヴ・ブドー・棕櫚が植えられている。土地は山地から流れおちる水流によって灌漑され、炎熱の候でも水かれることなく充分に水分を与える」²⁰

旧新約には、ガリラヤの農業にふれた記事が散見している。古くはソロモン王の頃、この土地産の穀物・ブドー酒・オリヴ油がフェニキヤ地方に供給されていたことが知られ、²¹この需給関係はイエスの時代においてもかわりなかった。²²パレスティナ地方全体としては、穀物の産は決して豊富ではなく、飢饉のさいは忽ちにして困窮におちいったが、ガリラヤ地方は平常においては自給して余りがあり、権力者達はそこに穀倉をおいて現物の蓄積をなし得た。²³そこでなされた、イエスの宣教運動の環境から農民的雰囲気を感じとることが出来、彼自身がしばしば用いている譬話のなかには農業に関したものが多く、²⁴そこからも、ガリラヤにおける農民的環境の根強さを見ることが出来る。

穀物のほか、良質かつ多量のオリーブ油を産した。「ガリラヤで一やまのオリーブ樹をしたてをるのは、ユダヤで子供一人を育てるより易い」⁽²⁵⁾とされ、その産出と集散によって名を知られた都市もあった。オリーブ油の売買や移出は、野心的な商人の投資の対象とされ、それによって巨富を積み、都市におけるデマゴグになり得た例もある⁽²⁶⁾。

ガリラヤ湖のほとりは、各種の農産をもつて知られたが、ほかに湖上の漁業も盛んで、湖畔には、タリケーア（塩乾魚の意）、ベッサイダ（魚の家の意）の如く漁業に関連した名の都市があった。この湖上の漁業権は、オリエント一帯に見られた如く、個人に与えられず、各都市に組織されていた漁業組合に与えられていたものと考へ得る⁽²⁷⁾。イエスに従った漁夫出身の弟子達もこのような方式で操業していたことを思わせるものがある⁽²⁸⁾。漁夫のみならず、この湖上の運輸にあたった船夫達も同じく組合組織をもち、湖畔の新興都市ティベリアスの船夫組合は、ユダヤ戦争のさい、その都市的無産者と同盟して反乱の暴力面を担当するはげしさをもっていた。

ガリラヤ住民の階級構成と各層間の意識のちがいによる対立関係を最もよく示すものとして、このティベリアスの場合がある。この都市の建設は、ガリラヤの支配者、ヘロデリアンティパスが領内のヘレニズム化政策の一端として行ったもので、その名も、彼のバトロンであるローマ皇帝ティベリウス（14—37）にちなんでつけられた。その建設の時期はA.D. 26年頃とされる。彼はヘレニズム国王連の先縦にならない、この都市建設にあたっては、領内各地から各層の住民をあつめ、時には強制を加え、時にはそれにもまして各種の特権や恩恵を約束して、そこへの移住を促めた。アンティパスはここに居をうつし、かくてガリラヤのメトロポリスは、従来のセフォリスにかわってこのティベリアスとなった。この新設都市の市民構成はある意味においてガリラヤ地方の社会構成の縮図と見られないこともない。時期的には多少おくれるが、ユダヤ戦争開始の頃のこの都市の情勢についてヨセフォスは重要な史料を供する。

ローマに対する反乱の前哨戦とみるべきガリラヤ戦争のさい、ここの市民は階級的な党派分裂を示していた。第一の党派として、この都市、従ってこの地方の政治と経済の実権を握った富裕者層 (*euporoi*)^③があり、彼等のなかにはヨルダンの彼方に所領をもつような地主的性格を兼ねそなえる者もいた。彼等は当然のことながら親ローマ的傾向が強く、従ってまたローマによる統治を謳歌するもので、市民達に対しては、ローマに対する忠順を呼びかけていた。第二の党派はこれと鋭い対立を示した無産者達 (*aporo*)^④と呼ばれた都市的無産者で、ローマ勢力に対して旺盛な敵意をむき出しにしていた。ヨセフオスはこの都市的無産者を扇動してそのリーダーたんとした野心的デマゴグ達をとくにとりあげ、これを第三の党派とする。これは、その出身においては第一の上層市民から疎外された者達で、抗戦的な第二の党派をなした都市的無産者によびかけて異邦的ローマの干渉を排して独立を叫び、その世なおしを機に、政治的・社会的混乱に乗じて自らの野心をとげる好機会としてねらっていた。^⑤このデマゴグはこの都市的無産者を動員し、それをもってやがて現われる熱心党と同盟して対ローマ反乱へと合流してゆくのである。

この都市建設にあたり、アンティパスは、ガリラヤ各地の土地をもたぬ貧農や都市的無産者等の下層者に対して、土地や家屋を供するなどの恩恵を施して、そこへの移住を奨励した。彼等はこのような上からの優遇にも拘らず、都市的無産者の域を脱することが出来なかったのは、当時この地方の豊富な農漁業の生産物を基盤にした活発な貨幣経済——もとよりそれはローマのそれに従属したところの——に対応し得なかったことを意味する。これらの者達はその階級的対立意識の面でメシア待望の信仰と結びつく傾向を常に示した。A.D. 一世紀の前半において、幾多の挫折にも拘らず、相ついでおこった一連の反ローマ的、従ってまた親ローマ勢力打倒をスローガンとした反乱は、外面的にはメシア期待の狂信に裏づけられていた。彼等はこのさい最も動員され易い階層であり、その反乱において暴力の面を担当せしめられることになったのである。

【注】

- ① 士師、五一八
- ② 拙稿「ヨセフオス試論」(人文社会19号) 五七頁
- ③ bell. III 40
- ④ ant. XIV 429
- ⑤ ルカ、九五四
- ⑥ bell. II 192~
- ⑦ ibid. 199
- ⑧ Strack-Billerbeck, op. cit. S. 156
- ⑨ G. A. Smith, The Historical Geography of the Holy Land 18ed. P. 421
- ⑩ Tacitus, Historiarum VI 3
- ⑪ ヲタイ、九二三 一五二〇
マルコ、二四 三九 その他多数の個所に ochlos と pleithos の語が頻出し、福音書におけるこの用語はレギオンである。
- ⑫ bell. III 40~
- ⑬ vita (45) 235
- ⑭ S. Merrill, Galilee in the Time of Christ 1904 P. 21
- ⑮ ヲ、二五二九
- ⑯ J. Beloch, Die Bevölkerung der griech-rom. Welt 1886 S. 246~

- ⑰ bell. I 170
- ⑱ ルカ、二四・四四
- ⑲ bell. III 40
- ⑳ ibid. 44
- ㉑ 列王上、五二一 歴代志下、二二〇
- ㉒ 行伝、一二二〇
- ㉓ vita, (24) 119
- ㉔ マルコ、四二六 ヲタイ一三二四 二〇一 その他農業的環境に於てはヲタイ一二二等のほか多数の個所
- ㉕ Strack-Billerbeck, op. cit. S. 156
- ㉖ vita (14) 74~ ギスカラのヨハネを代表とする。彼はその町のオリブ油の独占権をにぎり、そこで海港カイサリアとの間の40倍もの油の値開きを利用して巨富をつんだ。
- ㉗ T. Frank, An Economic Survey, Vol. IV F. M. Heichelheim, Roman Syria P. 230
- ㉘ ルカ、五七
- ㉙ ant. XIII 36
- ㉚ vita. (9) 32~
- ㉛ ibid. 36

三 ガリラヤ人と熱心党

B.C. 二世紀の半ば頃、ハスモン家によるシリア王国からの独立運動が民衆的支持のもとに成功をみてからは、レビ族系の祭司の出であるこの一族から、イスラエルを救うべきメシアがやがて現れるであろうとの期待がたかまるに至った。このハスモン家初代の勇者ユダにまず望みがおかれたが、彼は戦陣に死し、ついでヨナタンに期待がかけられたが、彼もたおれ、最後に望みはシモンにかけられた。この三者は兄弟関係にあり、彼等によってこの王家の基礎がすえられたといつてよいものがある。

シモンは、イスラエル全民衆によつて、ハスモン家最初の王にして大祭司をかねるものとされ、しかもその地位は彼の子孫に世襲さるべきものと承認された。^①イスラエルの民の理想としてきたテオクラティアはこのようにして一応実現をみることになり、これを謳歌した民衆はシモンにおしみなき讃歌をささげた。しかし、彼も一門間の内訌によつて最後を全うせず、その子ヨハネス・ヒュルカノスが王位についた。彼は明瞭に、国王・大祭司・預言者の三つをかねた現実のメシアと仰がれたことは、この頃まだこの王家に対する支持をかえることのなかったパリサイ派知識人の手になる黙示文学「十二族長の遺訓」^②において見られる。しかし、彼の治下において、内部的には上層のサドカイ派と中層以下に指導力をもっていたパリサイ派との間に鋭い対立があり、彼はサドカイと結んでパリサイ派をすてたことから、彼にかけたパリサイ派の期待は消滅するに至った。これは、この王家のヘレニズム化政策とも関連があり、これに反撥したパリサイ派の彼によせた、国王にして大祭司と預言者をかねた現実のメシア出現の期待は霧散した。彼の異教に対する妥協はパリサイ派にとっては許しがたいものであった。

パリサイ派の宗教観念の文学的表現は、時の黙示文学にはかならなかったが、黙示文学とは、その表現において超

自然的・超理性的な幻妙怪奇なものをもち、宗教的扮装をまといながら、實質上は最も現実的な政治的希望をゆたかにもりあげた文学にはかならなかった。従つてその時時の政治・社会的情勢に従つて限りない流動性をもつものであった。彼等にあつては現実の世界にかけた理想像がくずれ去つた場合も、そのまま挫折におわることなく、さらに輝かしい希望の実現を未来に托することになる。そして打解しがたい現実の苦難が増大すればする程、そこには未来への希望の黄金時代が開けていった。彼等のまちのぞんだことは、未来の或る時点において、神の代理者としてのメシアが出現し、それによつて現実の苦難にみちた情勢の逆転が行われるということにあつた。このようなメシア待望の信仰を合理化するため、たとえその実現は一に神意如何にかかつているにせよ、それが現れる時期の測定や、その実現のための条件の考察などを豊かにもりあげることになる。このような黙示文学は、このシモンやヒュルカノスの時代にゆたかなみもりを示した。

代々のハスモン家の支配者にかけた期待も次つぎに破れさり、最後にヒュルカノスにかけた希望も裏切られたパリサイ派知識人は、これらによせてきたレビ族祭司的メシアに望みをたち、新たに、かつて彼等民族の黄金時代を現出したことのあるダビデ王の末裔から出るメシア像にのぞみを托することになった。そしてこのようなメシア像は、ハスモン家の末期ローマの干渉の手が露骨にあらわれようとしていたB.C. 70 / 50頃に、その頃的情勢を反映して書かれたとされる「十二族長の遺訓」の加筆の部分^③にあらわれてくる。さらにこれとほぼ同じ時期の成立をみたとされる「ソロモン詩篇」においては、そこに期待されるメシアは、ダビデのすえから出るイスラエルの義なる支配者であると共に異邦人に対して復讐をとげる「戦いのメシア」として現われる。^④このように、期待されたメシア像は、次第により具體的な、そしてより尖鋭な姿をとてることがわかる。「戦いのメシア」という觀念は、それ自体比喩的なものであるにしても、これを文字通りにうけいれる可能性をふくむような政治状態が次第に展開されてくる。メシアが復讐を

とげるといふその異邦人とは、具体的にはローマ勢力とそれを代弁するユダヤの上層勢力にほかならぬことが次第に明かになってくるのである。

黙示文学一般については、ここでふれるべくもないが、これらの多くはエルサレムに居住したパリサイ的知識人の手になったと普通云われる。^⑤同じくパリサイ派と規定し得るグループにも、厳格な戒律主義にたち、従って形式主義に流れがちなパリサイ派の本流のほか、このような文筆活動を行った黙示文学的パリサイ派ともいふべき知識層の存在も見られた。彼等によって一連の黙示文学が提示され、これがのちのユダヤ教のみならず、キリスト教に対しても深刻な影響を及ぼすことになった。ガリラヤ地方はこのような文学の生産の場所ではなかったにせよ、チャールズは、このような黙示文学にもられた黙示的ユダヤ教 (Apocalyptic Judaism) の思想は、ユダヤよりもむしろガリラヤ地方の住民の間に強く息づいていたことを強調する。^⑦

ハスモン家の末期からヘロデ王の治世にかけて、ユダヤ本土からエクソダスを行って出国する住民が相ついだ。そのさい、ガリラヤに定着した者達は、農・牧その他の世俗的職業に従う俗人を主流としていたことは明かであるにしても、彼等の意識を代弁し、その精神的指導に任じたパリサイ派やその祭司達もまじえていたことは明かであろう。そして彼等によってガリラヤの村落・都市いたるところに会堂の建設を見、また彼等によってその経営がなされた。それはもとより、エルサレム神殿の管轄を逸脱するものではなかったにせよ、それから強い拘束を受けることもなかったであろう。しかし、エルサレムからは、この本流からはなれがちなガリラヤにおける祭儀の指導と監督のためには、神殿所属の祭司やパリサイ学者を派遣する必要もあつたであろう。しかし、ガリラヤ住民のエルサレム神殿に対する本山意識は各地に散在したあらゆるイスラエルの民に比して決して弱かつたわけではない。ガリラヤ住民が、エルサレム神殿における祝祭日には大挙して参加している例は、福音書やヨセフス史料において数多く接するところ

である。ともあれ、ガリラヤの会堂にあっては、ユダヤ本土と異なって自由な空気が流れていたことは明かで、そこでは、祭司たらざる俗人でも講壇にたつて説教もなし得たことは、イエスの場合についても見られる。

E・ルナンの表現をもってすれば、^⑨「ガリラヤは自由であり、何にもまして幸福にもパリサイ的ペダントリの束縛を受けることが甚だ少なかった点、エルサレムよりもすぐれていた」。ガリラヤの住民に対してとくに強い影響力をもった黙示文学は、その時時の政治・社会情勢に従って限りない流動性をもち、それは自由な解釈を許すものであった。とくに、メシア待望の期待が、ガリラヤの激情にささえられたさい、「戦いのメシア」にひきいられたイスラエルの民が武器をとって異邦人勢力にたちむかうという、最も現実的な反乱という形式をとって具体的に表現されることになるのである。これがいわゆる熱心党的反乱であり、それが、歴史的・社会的条件にささえられてガリラヤをその揺籃の地としたのも云わば当然のこととしなければならぬ。

熱心党という名の急進的な集団は、A.D. 6年、戸籍登録がローマ権力によって強行されたのを機に反乱を指導したガリラヤ人ユダヤによって創始されたと普通に云われている。しかし、このユダは、その後引続いてみられた、反ローマ的抵抗の諸運動に対して大きな影響を与えているにせよ、彼自身は、その集団そのものの創始者ではなく、熱心党という名は、のちのユダヤ戦争(66-70年)のさいに現れた急進的な反ローマ的抵抗者達の自称であった。この事についてはさきに論証した^⑩ことがあり、従ってイエスの時代には、反ローマ的抵抗者の集団の存在は見られたにせよ、それは熱心党^{Zealots}という名をもったものではないことを明かにした。なおそれに関連して、このユダの徒やその後引きつづいていわゆる熱心党的な抵抗者達は、親ローマ的立場にあった時の祭司貴族達、とくにこれを代弁したヨセフ・カスによつて憎悪と軽侮の意を充分にこめて、単に「ガリラヤ人」と呼ばれていたのではないかと推定した。

これをヨセフ・カス史料、とくにその「自伝」についてあたつてゆくと、この推定を裏づける個所が頻出してゐるこ

とがわかる。ヨセフォスにおいては、ガリラヤ人 (Galilaeos) という表現は二通りに使い分けられている。一は広く地理的表現としてのガリラヤ地方の住民という意味で用いられており、この表現はもとより絶対的に多数をしめる。ほかに限定的な内容をふくませ、狂信的抵抗者という特定の意味をおわせて用いている個所もかなり見られる。普通、熱心党の創始者とされている「ガリラヤ人ユダ」についても、そのガリラヤ人 (Galilaeos) は単にガリラヤ地方出身という一般的表現と解すべきでなく、後者の特定の限定的な意味にとるべきである。

ユダヤ戦争開始の頃、ガリラヤの守備防衛司令官として赴任したヨセフォスは、ガリラヤにおける都市的デマゴグに対してはげしい敵意と闘志をもやし、これらとの対立抗争の記述は、彼の自伝の少なからぬ部分をしめている。これらのデマゴグは都市的無産者を動員し、これを組織して熱心党的反ローマ抵抗勢力と同盟し、それに合流してゆく。ティベリアスのデマゴグであるユストウスは、ヨセフォスに対抗する歴史家としても名をのこす人物であるが、彼はその都市の下層市民達に呼びかけるさい、「今や武器をとってかのガリラヤ人達と結ぶべき時」^⑪としてこれを扇動した。また、同じくティベリアス居住の「船夫達と無産者達」の同盟の首領であったサファイアスの子イエスは、彼等をひきいて「ガリラヤ人達と合流してその王宮をおそって火を放ち、多くの略奪を行い……やがてそこに居住するギリシヤ人達をすべて殺りくした」^⑫。また「ティベリアスの（上層）市民とガリラヤ人達は互いにはげしい憎悪をかきたてていた」^⑬。これに対して「ガリラヤ人達は猶予すべき時にあらずとしてティベリアスの（上層）市民に対する挑戦を主張してやまなかった」^⑭。ガリラヤのメトロポリスであるティベリアスにおいて、とくに彼等が「ガリラヤ人達」と呼ばれていることは、それが一般的地理的表現ではなく、特定の限定的な意味、即ち狂信的な、反ローマ的抵抗者達を意味するものと解されねばならぬ。やがてこれらガリラヤにおける反ローマ的抵抗者達は、デマゴグであるギスカラのヨハネを首領としてイエルサレムにのりこみ、その親ローマ的上層者をたおし、市民達

を反ローマ抗戦にかりたてることになるが、彼等は自らを熱心党と自称するに至るのである。^⑮

以上のように、熱心党という名の抗戦団体が現われる以前の、熱心党の前身とも云うべき反ローマ的抵抗者達をヨセフォスは単に「ガリラヤ人」と表現していることがわかる。A.D. 6年ユダヤがローマの属州とされ、その手始めに戸籍登録が行われたのを機会に反乱をおこしたガリラヤ人ユダとその徒党は、その性格と系譜において後の熱心党とながるにしても、ユダは決して熱心党そのものの創始者ではなかった。彼自身が「ガリラヤ人ユダ」と呼ばれた如く、彼によって確立をみたとしてよい反ローマ的抵抗精神にたった徒党は熱心党と自称する以前には単に「ガリラヤ人」と呼ばれていたとせざるを得ない。このように、少くともヨセフォスにおいては、「ガリラヤ人」という表現は一般的地理的な広義のほか、このように限定的な特殊の内容をおわされて用いられている事に注意が喚起されなければならない。

ともあれ、イエスの宣教運動は、熱心党的抵抗精神が横溢していたガリラヤにおいて行われ、そのような動きと微妙な交錯関係にあったのであり、それはガリラヤ的精神環境とは決して無縁のものとしておこなわれたものではなかった。

【注】

- ① IMacc. 14:25～
- ② Testaments of M Patriarchs, Test. Levi VIII 14
- ③ *ibid.* Test. Juda xxiv 5～
- ④ Psalm of Solomon, 17:23～
- ⑤ Encyclop. Biblica, col.241～
- ⑥ これらの黙示文学の発生地をガリラヤと見る説もある。

P. H. Charles, Religious Development between the Old and the New Test. 1919 P.156～

- ⑦ *ibid.* P.33
- ⑧ בְּגֵדֵי גָלִיל
- ⑨ E. Renan, Vie de Jesus P.124
- ⑩ 拙稿「熱心党をめぐって」・三の問題」(人文社会2号)
- ⑪ *vita*. (9) 39
- ⑫ *ibid.* (12) 65

⑬ ibid. (29) 143

⑭ ibid. (59) 305

⑮ bell. IV 159

小稿の内容はこの大きな標題のごく一部の序説をなすものに過ぎず、またその内容において以前の拙稿「熱心党をめぐる二三の問題」の補正をなすものである。この大きな標題にもり得るものは、次の機会にゆずりたい。

(一九六四年 三月)